



火をおこす

1 はじめに

- 人間と火との関係を考える

2 発火法の種類

- 近代以前の発火法

摩擦式発火法…木と木をこすり合わせて木屑きくずを生じさせ、それが摩擦熱まさつねつによって発火し採火する。

かいてんまさつしきはっかほう きりも ひもきり ゆみきり まいきり
回転摩擦式発火法…鑽揉み式・紐鑽式・弓鑽式・舞鑽式

おうふくまさつしきはっかほう
往復摩擦式発火法…火溝式・鋸式・糸鋸式

ひばなしきはっかほう
火花式発火法…石と鉄（含炭素量 0.02 ~ 2 % の鋼はがね）を打ち合わせて、火花を生じさせて採火する。

2 文献史料に記された発火法と発火具

3 出土資料からみた発火具

4 発火法の変遷

- 摩擦式発火法と火花式発火法の盛衰

5 香川県と周辺地域の火花式発火法の様相

- 火打石を素材に中世から近世の流通を考える

6 さいごに

参考文献

- 岩城正夫・関根秀樹 1983 「古文獻に見られる古代発火技術について —主に日本のばあい—」『人文学部紀要』第 18 号、和光大学人文学部
大西雅広 2009 「火打関係史料拾遺」『研究紀要』27、財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団
大屋道則 2007 「火打石小考」『研究紀要』第 22 号、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団
小川貴司 1996 「火打石の提起する諸問題」『土筆』第 4 号、土筆舎
小林克 1993 「江戸の火打石 —出土資料の分析から—」『史叢』第 50 号、日本大学文理学部内日本大学史学会
白鳥章 2005 「千葉県内出土の発火具の集成と様相」『千葉県文化財センター研究紀要』24、財団法人千葉県文化財センター
東京都江戸東京博物館 2002 「火打ち道具の製作 調査と映像記録 映像音響資料制作に伴う調査報告書 6」
眞野修 1998 「土佐・阿波の火打道具調査メモ」『民具集積』4 号、四国民具研究会
森本嘉訓 1992 「大田井の火打石探掘遺跡とその用具および伝承」『徳島民具研究』第 4 号、徳島民具研究会

史料1

『古事記』上卷

櫛八玉神、鵜に化りて海の底に入り、底の赤土を咋ひ出でて、天の八十平瓮を作りて、海布の柄を鎌りて燧白に作り、海蓐の柄をもちて燧杵に作りて、火を鑽り出でて云ひしく、

この我が燧さる火は、高天原には、神産巢日御祖命の、とだる天の新巢の凝烟の八拳垂るまで焼きあげ、地の下は底つ石根に焼き凝らして、拷縄の千尋縄打ち延え釣せし海人の、口大に尾翼鱸、さわさわにひきよせあげて、柝竹の、とをとををに、天の真魚咋、献るといひき。

(倉野憲司校注1963『古事記(岩波文庫)』、岩波書店)

史料2

『貞観儀式』 践祚大嘗祭儀中

先^レ祭七日鎮^二大嘗宮齋殿地^一、(中略) 焼灰率^二造酒童女^一参進、童女始鑽^二木燧^一、次稻実公鑽^二出火^一、次烧灰吹^レ火、次子弟以^二松明^一炬^レ之

(渡辺直彦校注1980『神道大系 朝儀祭祀編1』、神道大系編纂会)

史料3

『年中行事秘抄』

旧記に云。垂仁天皇之代倭姫ノ皇女為^二伊勢ノ大神ノ御杖代^一、于時依^二随大神ノ託宣^一。從^二大和ノ国^一向^二伊勢ノ国^一。到^二志志ノ郡^一齋^二片樋ノ宮^一。從^レ發^二彼ノ宮^一乘^二三隻^一向^二佐志津^一御暫留^レ爰^二夜鳥ノ鳴聞^一於葦原。倭姫皇女遣^レ人令^レ見。有^二一隻鶴^一守^二八根ノ稻^一。穂ノ長八握可^レ謂^二瑞穂^一。倭姫皇女使^二人荊採^一。欲供^二大神ノ御食^一。即折^二木ノ枝^一刺合^レ出^レ火炊^二彼ノ稻ノ米^一奉^レ供^二大神^一給。從^二此時^一神嘗祭発故毎^レ到^二神態^一鑽^レ火炊^二燧謂^二之忌火^一。

(塙保^二一編^一1932『群書類従』、続群書類従完成会)

史料4

『倭姫命世記』

令^レ進^二太神御贄^一而、佐佐牟乃木枝乎割取而、生比伎尔宇氣、比伎良世給時尔、其火伎理出而、采女忍比賣我作之天平瓮八十枚持而、伊波比戸尔仕奉岐

(神道大系編纂会編1981『神道大系 首編1』、神道大系編纂会)

史料5

『古事記伝』 本居宣長 寛政十年 (1798)

今も大神宮忌火屋殿にて神供を炊く火は皆切火なり。其法は、よく枯たる檜の木口を切り、その木口の中央にすこしくほみを付て、又錐の柄の如くなる木を以て、力を入れてかの木口をつよくもみて火を出すなり。右の杵は檜にても、又は山枇杷といふ木にても作るとなり。

火切板は、長さ三尺許、広さ五六寸、厚さ一寸ばかりなる檜の板なり。火切杵は、長さ二尺五六寸ばかりなる細き空木のまる木にて、是は板杵ともに、年毎に新に造れる物にて、是を以て火をもみ出すなり。

(大野晋・大久保正編1968『本居宣長全集』、筑摩書房)

史料6

『筆のまにまに』 菅江真澄 文政年間 (1818 ~ 1829)

三河ノ国の八名ノ郡、賀茂郡などには檜杉の二尺にはば二寸ばかりなるに、のこぎりにてひき目をつけて、うつ木を錐としてもみいだせり

(深津正1983『燈用植物(ものと人間の文化史20)』、法政大学出版社)

史料7

『久摺日記』 松浦武四郎 万延元年 (1860) 序・文久元 (1861) 跋

よく乾たる榎松椴の木か、サルナシの木か、赤たもの木の久しく水に浸り晒されたるを揉む時は、上下熱して火出るなり。それを樺木に附るなり

(深津正1983『燈用植物(ものと人間の文化史20)』、法政大学出版社)

史料8

『延喜式』卷七・神祇七・踐祚大嘗祭

凡織神服者。(中略)其作具所須小斧四具。鑿四具。刀子四枚。鉋四枚。錐三隻。火鑽三枚。已上料鉄二延。(後略)

凡心供神御由加物器料者。(中略)阿波國所献(中略)作具鑿。斧。小斧各四具。鎌四張。鑿十二具。刀子四枚。鉋二枚。火鑽三枚。(後略)

(黑板勝美編輯1990『新訂増補国史大系(普及版)延喜式 前篇』、吉川弘文館)

史料9

『延喜式』卷三十・大蔵省

凡出火水精十顆。瑪瑙十顆。出火鐵十具。

(黒板勝美編輯1980『新訂増補国史大系(普及版) 延喜式 後篇』、吉川弘文館)

史料10

『令義解』卷五・軍防令

每五十人火鑽一具。熟艾一斤。(後略)

(黒板勝美編輯1980『新訂増補国史大系(普及版) 令義解』、吉川弘文館)

史料11

『紀貫之集』卷八・別

おなじ少将のもとへ行人に火うちの調度をてうじて、それにたきものをくはへてやるによめる
をりをりに打ちたく火の煙あらば心ざす香を忍へとぞ思ふ

〇

史料12

『後撰和歌集』卷十九・離別羈族

とをきくにへまかりけるともだちに火うちにそへてつかわしける よみ人しらず
このたびも我を忘れぬものならばうちみんなたびに思ひ出なん

(工藤重矩校注1992『後撰和歌集(和泉古典叢書3)』、和泉書院)

史料13

『日本紀略』卷十一・一条

寛弘二年(中略)左大臣於仏前取火打誓言云、若依此功、我子孫相継可施栄華者、此火一度可付也。一度付之。衆人莫不感嘆

(黒板勝美編輯1990『新訂増補国史大系(普及版) 日本紀略 後篇』、吉川弘文館)

史料14

『毛吹草』卷第四 松江重頼 正保二年(1645)

山城 鞍馬燧石・醍醐摺火打 紀伊 熊野燧 阿波 燧崎燧石 豊後 久多見燧 肥後 火川火打石

(松江重頼編輯・新村出校閲・竹内若校訂1933『毛吹草(岩波文庫)』、岩波書店)

史料15

『雲根志』前編二 木内石亭 安永二年(1773)

火打石は名産多し、國々諸山或いは大河等にあり、色形一ならず。山城國にあるは色青し、美濃國養老滝の産同じ、此二品甚だよし、(中略)阿波國より出るはこれに次、筑後火川、近江狼川は下品也、水晶石英の類も、よく火を出せども、石性はやはらかにして、永く用いがたし、加賀或は常陸の水戸、奥州津軽等の馬腦大によし、駿河の火打坂にも上品あり、共に本草の玉火石の類なるべし

(木内石亭原著・横江孚彦訳2010『口訳雲根志』、雄山閣)

史料16

『阿州奇事雑話』 横井希純 寛政九年(1797)

那珂郡大井村の内大田井の火打石色青く火能出づ、海内の火打石第一品なるべき、京師。浪花。近国。西国辺皆此石を用ひ価貴し、実に宝の石なり、玉或は掛物の軸又風鎮などに磨造るべし、此類石は美濃の養老の火打石青く少し黒し、彼の近国之を用ゆ、大田井に亜く、常陸の水戸石山城の鞍馬火打石は白石なり、近年豊後の久多見火打石は色薄鼠なり、火出る事は他の火打に勝れり、然れども其の石堅きに過ぎて燧を損すとも云う

(横井希純著1797『阿州奇事雑話』、阿波郷土研究会1976『新編阿波叢書』上巻、歴史図書社)

史料17

『本草綱目啓蒙』卷之五石部 小野蘭山 文化二年(1805)

石膏、玉火石、龍石膏附

阿州勝浦郡太田井ノ田井村ノ火打石ヨク的當ス、方言オホタイカド、京師ニテ阿波ノ火打石ト云、白石微青ナリ、鐵椎ニテ打バ破ヤスクシテ、稜ツヨシ、暫ク用テ鈍クナレバ、又破リ用ユ、火打イシハ國々ニテ異ナリ、城州鞍馬ノ産ハ色黒シ、上賀茂ノ産ハ色赤、愛宕ノ産ハ色白シ、雲州ヨリ來ルモノハ緑瑪瑙ナリ、玉造イシト云、江戸ノ火打イシハ、水戸ノ白瑪瑙ナリ、又國ニヨリ瑪瑙ニ非ズシテ白色ナルモノアリ、(中略)増、阿波ノ火打石ハ、那賀郡大田井村ノ山中ヨリ掘出シ、諸國ニ送ル、勝浦郡二田井村等ノ名ナシ

(小野蘭山著1805『本草綱目啓蒙』、須原屋善五郎ほか)

史料18

『阿波志』 佐野之憲 文化期 (1804～1817)

燧嶽 大井村の西北に在り土瑪瑙を出す土人とり以って燧と爲す因て名づく

玉火石 大田井及び加茂出す色青く藍の如し採り以って燧と爲す又□□と爲すべし又中林出す者珍太郎稱す

(藤原之憲著 1815・笠井藍水訳 1976 『阿波志』、歴史図書社)

史料19

『讃岐国名勝図会』 松岡信正摸 嘉永七年 (1854)

阿野郡北 土産 火燧石 西庄村

(梶原景紹著・松岡信正画 1854 『讃岐国名勝図会』、安田健編 2004 『江戸後期諸国産物帳集成』第14巻、科学書院)

史料20

寛政二元酉年 (1789) 十二月

一 那賀郡大井村之内大田井火打石・加茂・細野・吉井三ヶ村都合四ヶ所、先達而為替方御仕成被 仰付候処、此度御役所来正月□御指止二付、以前之通、木頭御代官所へ御引戻被成候、尤此節大坂天満沢屋徳兵衛請所被 仰付有之候条、右姿を以引渡候様、右御奉行及下知候条、申談可 請取旨、木頭御代官へ以覚書、申渡之

(国立史料館編 1983 『徳島藩職制取調書抜』上、東京大学出版会)

史料21

寛政三亥年 (1792) 二月

那賀郡岩脇村百姓 乙右工門

火打石拔石大田井御制道役被仰付右御用相勤内脇差二步役御免被成旨御當職御書附を以被仰渡候に付當亥年□夫役引遣處如件

福岡今左工門 印

寛政三亥年二月

伏屋 岡三郎 印

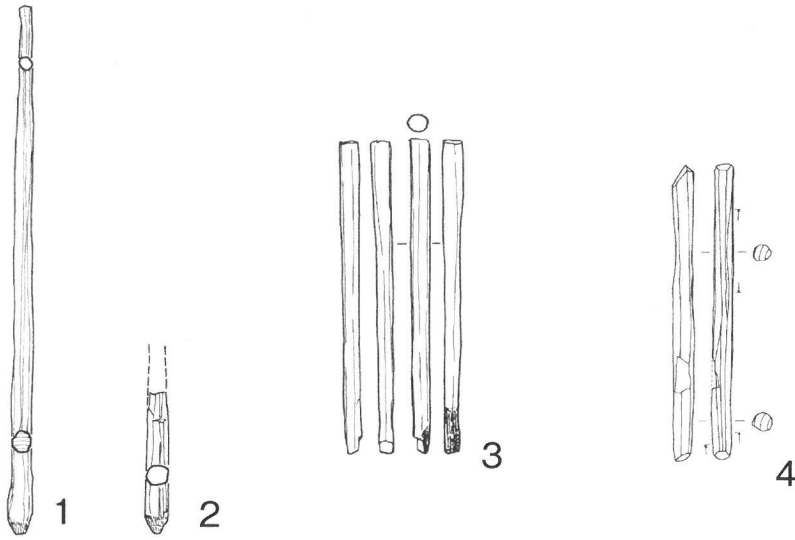
名東名西麻植三郡受持

穂積 早 蔵 印

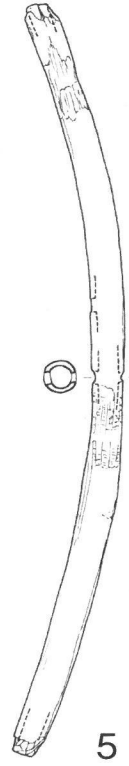
(田所市太 1928 『羽浦町史』)

資料7

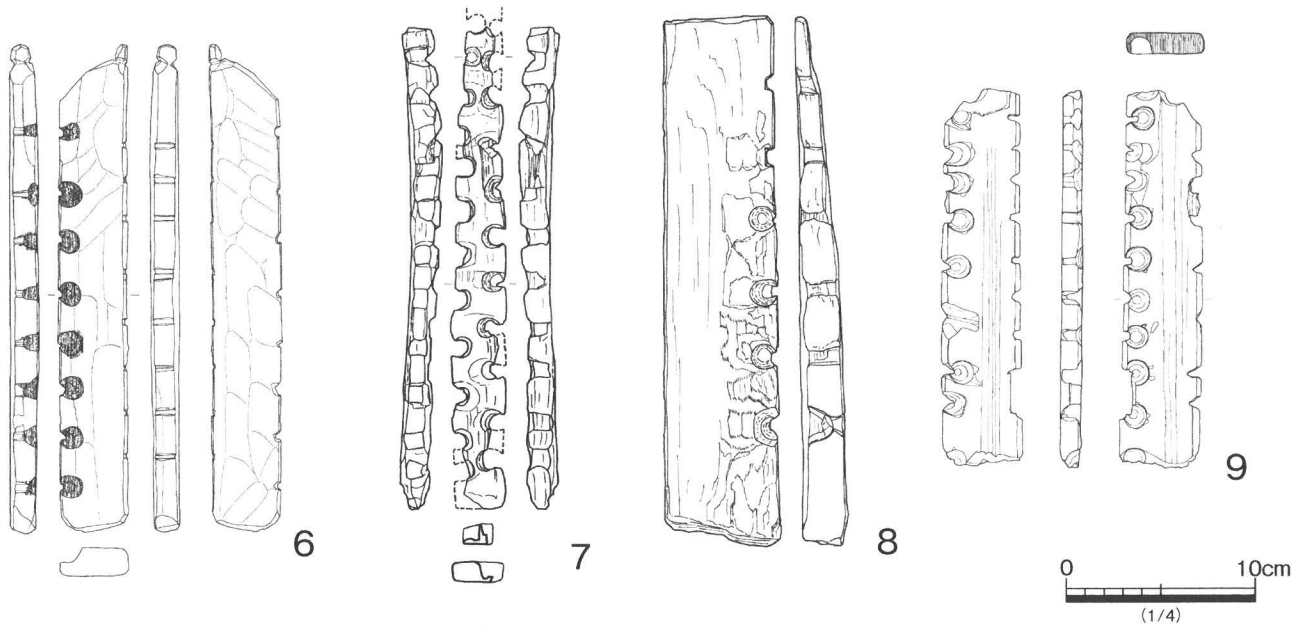
ひきりぎね
火鑽杵



ひきりゆみ
火鑽弓

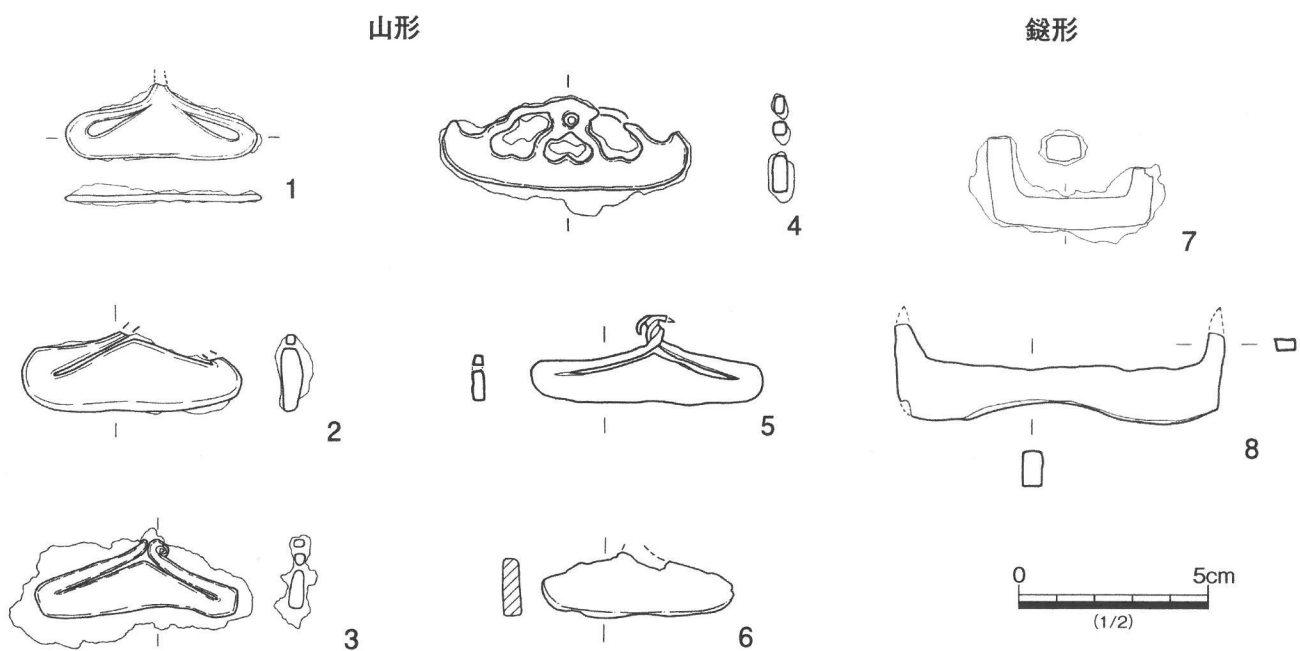


ひきりうす
火鑽臼



- 1・2 滋賀県高島市針江川北遺跡 (古墳時代前期)
- 3・6 千葉県茂原市国府関遺跡群 (弥生時代末～古墳時代前期)
- 4 千葉県君津市常代遺跡群 (弥生時代中期)
- 5 京都府向日市森本遺跡 (不明)
- 7 滋賀県高島市森浜遺跡 (弥生時代末～古墳時代前期)
- 8 京都府福知山市石本遺跡 (古墳時代後期)
- 9 福岡県福岡市比恵遺跡群 (中世)

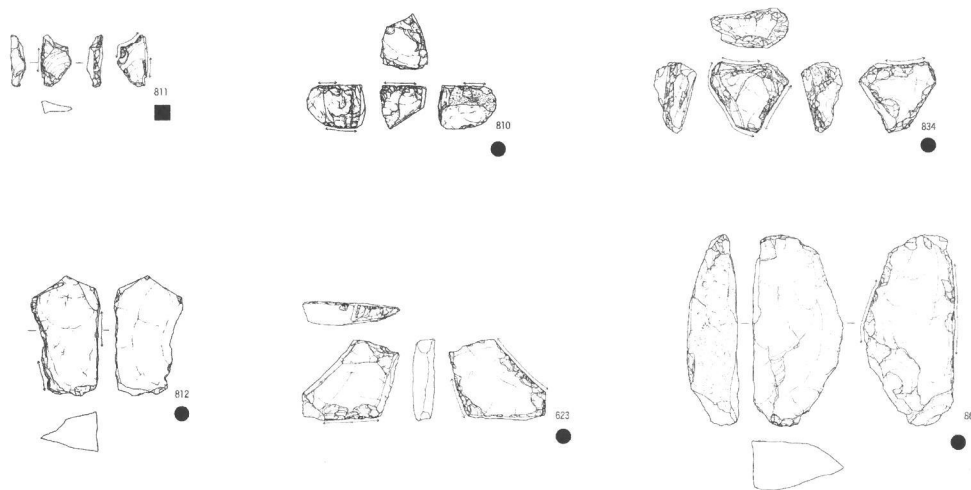
図1 遺跡出土の木製発火具



1. 香川・庄八尺遺跡 2. 徳島・宮ノ本遺跡 3. 徳島・中庄東遺跡 4. 徳島・田上遺跡 5・8. 愛媛・湯築城跡 6. 愛媛・等妙寺跡 7. 徳島・延命遺跡

図2 遺跡出土の火打金

川津川西遺跡



浜ノ町遺跡

松並・中所遺跡

● サヌカイト ○ 石英 ■ チャート

図3 高松市浜ノ町遺跡、同松並・中所遺跡、坂出市川津川西遺跡出土の火打石

資料9

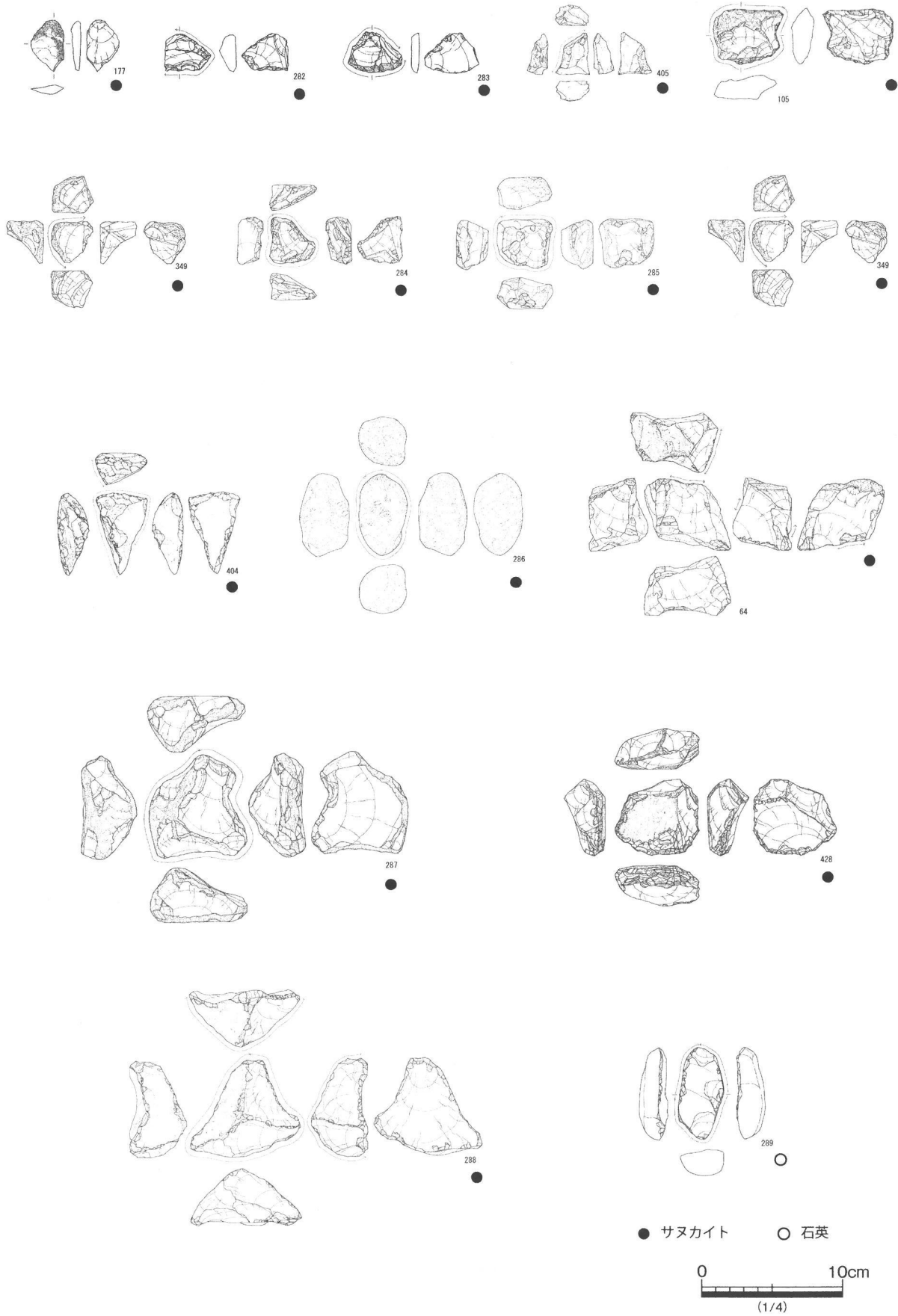


図4 多度津町庄八尺遺跡出土の火打石